

Campylobacter rectus を検出した 1 例

◎石端 裕一¹⁾、村上 裕美¹⁾、藤原 有花¹⁾
愛知県がんセンター¹⁾

【はじめに】*Campylobacter rectus* はヒトの口腔内常在菌である。主に歯周病などの歯原性感染症の原因菌として報告されており、海外では膿胸や菌血症の報告がある。今回、我々は一患者の左大腿骨膿瘍と血液培養より *C. rectus* を分離した症例を経験したので報告する。

【症例】患者：75 歳、男性。既往歴：歯周病（近医通院中）、肺腫瘍（20 年前）、肝機能障害、前立腺肥大（2 年前）。現病歴：原発不明癌の骨転移による左大腿骨骨幹部の病的骨折疑いで他院より転院。骨接合術施行中に骨折部位より排膿を認め、骨髄炎の疑いで膿瘍検体が提出された。また、術後に血液培養 2 セット提出された。

【細菌学的検査】膿瘍のグラム染色では白血球(3+)、グラム陽性球菌(3+)、グラム陰性桿菌(2+)を認めた。培養の結果、好気環境での発育は認めず、嫌気環境でのみ発育が認められ、グラム陽性球菌 1 菌種、グラム陰性桿菌 2 菌種が検出された。VITEK2 での同定の結果、グラム陽性球菌は *Parvimonas micra*、グラム陰性桿菌は *Fusobacterium unclatum* と同定され、1 菌種は同定不能となった。

血液培養は BACT/ALERT 3D を用いて培養を行い、培養 4 日目で嫌気ボトルのみ陽性となった。グラム染色にてグラム陽性球菌とグラム陰性桿菌の発育を認めた。ボトル内溶液のサブカルチャーの結果、膿瘍と同様に嫌気環境でのみ発育が認められた。同定の結果、グラム陽性球菌は *P. micra* と同定され、グラム陰性桿菌は同定不能となった。同定不能となったグラム陰性桿菌を質量分析にて同定した結果、両株とも *C. rectus* と同定された。なお、薬剤感受性検査を嫌気性菌の条件で実施したが発育不良であった。

【まとめ】本菌は好気環境、微好気環境ともに発育せず、嫌気環境のみで発育した。コロニーは培養 2 日目の時点で直径 1mm 程度の半透明で薄く広がるコロニーだった。コロニーのグラム染色ではらせん菌であることを認識することは困難だった。*C. rectus* は発育したコロニーの性状やグラム染色像より菌名を推定することは困難であると思われる。本症例により、微好気培養で発育せざるらせん菌として認識することが困難な *Campylobacter* 属菌が存在する事を知る機会となった。連絡先 052-762-6111(3425)